

2018/05/06

「人の根底にあるのは悲しみ」

「悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。」(マタイ 5:4)

「悲しむ者は幸い」だと聖書は教えていますが、私たちは、悲しみの感情を持っていることは、いけないことだと思いついてはいないでしょうか。

子どもの頃、転んだり泣いたりした時に、「痛くない！大丈夫」と言われたり、「それくらいのこと泣くんじゃない」と言われたり、本当は悲しいのに、その感情を選んではいけないと言われたことが、誰にもあることでしょう。このような経験によって、人は悲しみを隠すようになり、ある人は悲しい時に怒り、ある人はへらへらしたり、ある人は気丈にふるまってなんでもないふりをしたりします。クリスチャンの中には、自分は世の光だから、否定的な感情を抱いてはいけないと自分を律し、悲しみを隠そうとする人もいます。

しかし、「悲しみ」を否定してしまうと、自分の内側と外側のバランスが取れなくなり、やがて疲れ果ててしまいます。私たちは、「悲しみ」に対して、どのように向き合えば良いのでしょうか。

■悲しみの始まり

人類最初の悲しみの人は、アダムとエバです。ふたりは、神様に似せて造られ、何一つ不足のない、満ち足りた生活を送っていました。ところが、悪魔が二人に嘘の情報を吹き込み、神様が「食べてはならない」と言っていた木の実を「食べてもよい」と教えて、二人の心に神様と異なる思いを持たせました。

人はそれまで神様と一つの思いで結ばれていたため、神様と異なる思いを抱いたことによって、その結びつきを失い、神様の思いが見えなくなって、不安と恐怖を感じるようになりました。このときの、アダムとエバの感情を、一言で表すと「悲しみ」です。今まで神様と一つ思いで生きる最高の幸せの中にいた者が、その幸せを失うのは、「悲しみ」以外の何ものでもありません。

また、神様との関係を失ったことで、人は自分の力で生きていくことを余儀なくされました。生きることの重荷を背負わされた人間は、ここでも「悲しみ」を覚えます。「悲しみ」は、神様との関係を失った人間のごく自然な反応です。

アダムとエバの子孫である私たちも、神様との関係を失った状態で生まれ、その根底には、「悲しみ」の感情があります。神様から離れ、自分の力で生きなければならなくなったことによって、私たちは、人間関係や仕事の悲しみ、老いていく事への悲しみ、欲するものが手に入らなかったり、失ったりすることの悲しみ等、様々な悲しみにぶつかるようになりました。これらの悲しみは、もともと人間が持っていたものではなく、悪魔の仕業によってもたらされたものです。ですから、イエス様は「悲しむ者は慰められる」と言われたのです。

つまり、「悲しみ」の感情を持っていることは決して悪いことではありません。むしろ、神様との関係が壊れたことに「悲しみ」を覚えるのは当たり前のことであり、自分の悲しみはそこから発していると分かれば、神様の慰めを受け取ることができます。

しかし、残念なことに、私たちは「悲しみ」を隠す習慣を身につけてしまっているため、この慰めを受け取ることができません。自分が悲しんでいるということに気づくことができなければ、神様が慰めても、それを受け取ることができないのです。

■カインの悲しみ

「ある時期になって、カインは、地の作物から主へのささげ物を持って来た。また、アベルは彼の羊の初子の中から、それも最良のものを、それも自分自身で、持って来た。主は、アベルとそのささげ物とに目を留められた。だが、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それで、カインはひどく怒り、顔を伏せた。そこで、主は、カインに仰せられた。「なぜ、あなたは憤っているのか。なぜ、顔を伏せているのか。あなたが正しく行なったのであれば、受け入れられる。ただし、あなたが正しく行っていないのなら、罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋い慕っている。だが、あなたは、それを治めるべきである。」しかし、カインは弟アベルに話しかけた。「野に行こうではないか。」そして、ふたりが野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかり、彼を殺した。」

(創世記 4:3-8)

アダムとエバの子であるカインとアベルが、それぞれ神様に捧げ物をした時、神様は、アベルの捧げ物に目を留められましたが、カインの捧げ物には目を留められませんでした。カインは、アベルに嫉妬し、激しく怒り、そして、ついにアベルを殺してしまいました。

カインが怒った時、神様は、その怒りを治めるように、カインに言いましたが、彼は怒りを治めることができませんでした。どうすれば、カインは怒りを治めることができたのでしょうか。

彼の「怒り」や「嫉妬」の下に隠されていた本心は、「悲しみ」です。苦勞して育てた作物を、神様に喜んでもらえなかった、それが悲しかったのです。しかし、その悲しみを剥き出しにすることができなかつたために、アベルに嫉妬し、怒ったのです。彼は、アベルを憎みたかったわけでも、赦せなかつたわけでもありません。自分もほめてほしかったのに、ほめてもらえなくて悲しかったのです。自分を愛してほしい、見てほしい、それが彼の本心です。しかし、心がとっさにアベルに嫉妬し憎むという方向に向かい、「悲しみ」は影を潜めてしまいました。

もし彼が、自分の悲しみを素直に認めて、祈ることができていれば、この人類最初の殺人事件は防ぐことができたでしょう。しかし、人は失敗しなければ、なかなか「悲しみ」に向き合うことができません。カインも、殺人を犯した後によく自分のしたことを振り返って悲しみ、「私の咎は大きすぎて担いきれません」(創世記 4:13) と、神様に打ち明けること

ができました。そのとき、神様は、彼のいのちを守ると約束してくださり、彼は神様の慰めを受けとることができました。

とはいえ、彼が最初に怒りを治めなかったことによって、殺人が起きました。怒りは、放置しておく、二次三次の被害を生みます。ですから、できるだけ早く処理しなければなりません。

「怒っても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで憤ったままでいてはいけません。」
(エペソ 4:26)

この箇所を正確に訳すと、「怒りなさい。しかし、罪を犯してはなりません。」となります。怒りを抑えていては心が壊れてしまいます。ですから、聖書は「怒ればいい、しかし、怒ったときは、それ以上の罪を犯す方向に進むのではなく、そこに隠れた思いを探し、祈り、その日のうちに心に平安を得なさい」と教えています。つまり、怒ったときは、その下に隠れている「悲しみ」に気づき、神様にそれを打ち明け、平安を得なさい、ということです。

私たちがカインから学ぶべきことは、怒ったり、嫉妬したり、誰かのことを「赦せない」と思ってしまったりする時、それはその人の本心ではないということです。怒りや嫉妬の下には、例外なく「悲しみ」が隠れています。カインのように、「認めて欲しかったのに、ほめてもらえなかった」という思いは、見返りを求める罪ですし、大人げないと思うかもしれません。しかし、神様は、それが罪であっても、正直に「悲しみ」を打ち明ける人に、真摯に応えてくださいます。

■マルタの悲しみ

「さて、彼らが旅を続けているうち、イエスがある村にはいられると、マルタという女が喜んで家にお迎えした。彼女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていた。ところが、マルタは、いろいろともてなしのために気が落ち着かず、みもとに来て言った。「主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのでしょうか。私の手伝いをするように、妹におっしゃってください。」主は答えて言われた。「マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。しかし、どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。」
(ルカ 10:38-42)

マルタは、イエス様が来られたことを知り、喜んでイエス様を自分の家に招きました。彼女は嬉しくておもてなしに励みます。ところが、妹のマリヤはイエス様のところに座り、熱心に話を聞いていました。

それを見たマルタは、自分の思い描いていた様子とは違うと感じました。マルタはイエス

様から、「よくやってくれたね。ありがとう。」とほめられることを期待していたのです。ところが、イエス様の関心はマリヤに向けられ、自分がのけ者にされているような気がして、マルタはだんだんイライラしてきました。

マルタは、イエス様の関心が自分に向けられないことが悲しかったのですが、そんな子供じみた思いを剥き出しにするのははばかられたので、「お客様は手厚くもてなすべきだ」という「この世の心づかい」を持ち出してきて、「私だけがおもてなしをされていて、妹は何もしていないことを何とも思わないのですか。」と、イエス様に文句を言いました。

マルタの本心は、イエス様に文句を言いたかったのではなく、ただ、イエス様に認めてもらいたかっただけです。ところが、そうならなかったのが、悲しかったのです。つまり、彼女のイライラの下には、カインと同様、「悲しみ」が潜んでいたのです。

■パリサイ人の悲しみ

「自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとり取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人のほうが、前の人よりも、義と認められ、家に帰って行きました。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」(ルカ 18:9-14)

「私は〇〇のことができて、感謝します！」というパリサイ人の祈りは、一見、傲慢な印象を受けますが、これは他人事ではありません。なぜなら、私たちもパリサイ人と同じように、「神様を信じて歩んだら、こんなこともあんなこともできるようになりました。感謝します！」と、「達成できたこと」に目を向けて生きているからです。あからさまに誇ることはしなくても、誰もが、パリサイ人のように、心の中で「神様、今週も〇〇ができて感謝します」という祈りを捧げています。

なぜ人は自分の行いに目が向くのでしょうか。それは、不安だからです。自分に自信が無いから、何ができるかを自分の価値にするのです。人はみな例外なく、自分は愛される価値があるのか、そのままの自分では愛してもらえないのではないかという不安を抱えて生きています。つまり、愛されないかもしれないという「悲しみ」を抱えて生きているため、少しでも良い行いをして、自分の価値を高めようとするのです。パリサイ人が、心の中でこのような祈りを捧げたのは、自分に対する「悲しみ」があったからなのです。

パリサイ人は、自分の力で何とか自信の持てる人間になろうとし、自分のようにできない

人を心の中でさばいて、見下しています。しかし、取税人は、自信のない自分、自分に対する悲しみをそのまま神様に打ち明けました。神様は、この祈りを「正しい」と言われました。

自分の力で、自分に自信が持てるようになろうと生きる限り、神様の慰めを受け取ることはできません。神様は、悲しむ者を慰めるのであって、誇る者を慰める方ではないからです。自分に「悲しみ」があることを隠さず、それを神様にそのまま差し出すなら、神様はそれを否定せずに受けとめ、それを告白できたことは正しいとまで言ってくださいます。こんな慰めがほかにあるでしょうか。

■イエス・キリストの祈り

カイン、マルタ、パリサイ人は、自分達の怒りやいらだちや誇りの下に、悲しみが潜んでいることに気づいていませんでした。私たちも同様に、「悲しみ」を覆い隠す別の感情に振り回されて生きているのです。

神様との関係を失ったこの世界で生きている以上、誰もが、神様が見えない「悲しみ」を抱えており、そこから転じて様々な悲しみを抱いて生きています。「悲しみ」を避けることはできないし、「悲しみ」があるのは当然です。ですから、怒ったり、苦しくなったり、どうしようもないときは、埋もれてしまった「悲しみ」を見つけられるよう、神様に祈りましょう。そうすれば、神様がその心を受けとめて、言いようのない慰めを与えてくださり、心が平安になります。

イエス様ご自身が、悲しみの感情を堂々と告白し、祈っておられる場面があります。それは、十字架に架かる前のことです。イエス様は、悲しみを恥とせず、そのままの気持ちを弟子と父なる神様に打ち明けました。

「ゲツセマネという所に来て、イエスは弟子たちに言われた。「わたしが祈る間、ここにすわっていなさい。」そして、ペテロ、ヤコブ、ヨハネをいっしょに連れて行かれた。イエスは深く恐れもだえ始められた。そして彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここを離れないで、目をさましていなさい。」それから、イエスは少し進んで行って、地面にひれ伏し、もしできることなら、この時が自分から過ぎ去るようにと祈り、またこう言われた。「アバ、父よ。あなたにおできにならないことはありません。どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままを、なさってください。」(マルコ 14:32-36)

三位一体の神様の関係を断つ十字架の死は、何よりも恐ろしく悲しいことです。しかし、三位一体の神は、私たち人間を愛するがゆえに、その選択をなさいました。その悲しみを、イエス様は隠すことなく弟子達に表し、祈りによって平安を手にして、やがて「あなたのみこころのままをなさってください」と祈るに至りました。イエス様が「悲しみ」を隠さなかったということは、「悲しみ」の感情があるのは正しいということです。その「悲しみ」とどう向き合うのか、それが大切なのです。

私たちは、「悲しみ」を隠して、自分の力でハッピーになろうとしたり、自分は大丈夫と虚勢を張ったり、怒りの感情にすり替えたりしがちです。「悲しみ」を無かったことにして、やり過ごそうとしたりしてしまいます。しかし、そうやって隠してしまった「悲しみ」に気づき、神様にそれを差し出すとき、私たちは神様から慰めを受けることができます。それがどんなに罪深い事柄であっても、悲しいことは悲しい、苦しいことは苦しいと泣いていいのです。

私たちが「悲しみ」を認めることができるのは、自分では受けとめきれない「悲しみ」を受けとめてくださる方がいるからです。こんなに心強いことはありません。神様に「悲しみ」を打ち明けるとき、私たちはこの慰めを知り、神様が自分を引き上げてくださることを知ることができるのです。

「あなたがたは、苦しみなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい。主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高くしてくださいます。」（ヤコブ 4:9-10）